



JAPANESE
CIVILIZATION
INSTITUTE

日本文明研究所

24-5 Sakuragaoka-cho, Shibuya-ku, Tokyo 150-0031

Tel: 03-5456-8082 Fax: 03-5456-8388

Mail: info@japancivilization.org

http://www.japancivilization.org/

ニューズレター No. **1** 2015年秋号

設立にあたって



日本は独特の歴史、宗教、文化をはじめとして、固有の文明を形成してきました。

サミュエル・ハンチントン博士は、その名著『文明の衝突』で中国文明とは異なる日本文明を新たに位置づけています。

本財団は、日本自身が認識していない日本のアイデンティティ＝個性として、相互に関連する次の5つのカテゴリーの研究を深め、日本文明の研究と伝承を行うと同時に積極的な国内外への発信を行って参ります。

- 思想・哲学・倫理領域——日本思想、やまごころ、和の精神
- 経済経営領域——老舗
- 工芸・技術領域——美術、工芸、ファッション、ポップカルチャー、建築、テクノロジー
- 医療領域——漢方、和食、医食同源
- 総合領域——政治、宗教

これらの研究を深め、啓蒙活動を通して日本および世界の未来の平和と継続的發展へ貢献することを目的といたします。

理事長、都築学園グループ総長 **都築仁子**

所長から



世界史の流れのなかでヨーロッパが唯一、近代化のモデルをつくりあげたとされている。だがヨーロッパ以外で日本だけ、それに拮抗する独自の近代化の過程を歩み先進国となることができた。

日本列島は災害列島と呼ばれるほど洪水、噴火、地震、津波に襲われてきた。だが、清らかな水に恵まれ、爽やかに四季が訪れ、人びとの気質も緩やか、創意工夫に熱心でかつ勤勉、独自の文明を築いてきた。

経済や人的交流がよりグローバル化するなかで、日本と日本人には自分たちの拠り所についてより深い洞察が求められている。他の文明を受け入れる寛容な精神は、己れを知るところからはじまるのである。

国際社会で日本の果たす役割はますます重要になるだろう。日本文明研究所は有為の人材が切磋琢磨できる場所として誕生する。

所長 **猪瀬直樹**

海外からの祝辞

オックスフォード大学セントアンズ・カレッジを代表いたしまして、この度の「日本文明研究所」の設立と盛大なる記念シンポジウムの開催を心よりお祝い申し上げます。貴研究所の斬新な研究が本学を含む世界の日本研究者たちに知識とインスピレーションを与え、国際理解の推進に貢献するだけでなく、日本国民の方々に祖国へのさらなる愛情と誇りを与える偉業を達成されることは間違いありません。貴研究所の先生方の輝かしいご活躍と、都築学園グループのますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

オックスフォード大学セントアンズ・カレッジ学長 **ティム・ガーダム**

この度は、世界初の「日本文明研究所」の設立、ならびに設立記念シンポジウムの開催、誠におめでとうございます。ケンブリッジ大学フィッツウィリアム・カレッジ学長はじめ教授一同は、本研究所が世界的に著名な有識者を有し、そのユニークかつ最先端の「日本の個性研究」において世界の学術界をリードして行かれることを信じ、大きな期待と喜びを感じております。貴学園の歴史ある提携校として大変誇りに思いますとともに、今後、我々の提携が一層活性化されることを心より楽しみにしております。

ケンブリッジ大学フィッツウィリアム・カレッジ学長 **ニコラ・パドフィールド**

戦後70年を迎えて、 日本文明の特徴とは

田原総一郎 × 猪瀬直樹 × 後藤俊夫

日本文明研究所設立記念のシンポジウムが、2015年8月28日東京・渋谷の日本経済大学で開催されました。パネリストは、ジャーナリストの田原総一郎、作家で同研究所所長の猪瀬直樹、日本経済大学大学院教授の後藤俊夫の三氏で、「戦後70年を迎えて～日本文明の特徴とは」をテーマに行われました。以下、その内容をご紹介します（鼎談部分は『週刊読書人』2015年9月25日号より転載）。

司会 本日は公私ともに大変お忙しい中、一般財団法人日本文明研究所設立記念シンポジウムにご出席賜り大変ありがとうございます。司会を担当いたします生島佳代子と申します。本日はどうぞよろしく願いたします。三名の先生方にパネルディスカッション形式でお願いしております。シンポジウムに入ります前に開設記念にあたり、一般財団法人日本文明研究所理事長で都築学園グループ総長の都築仁子先生よりひと言ご挨拶をさせていただきます。

都築 皆さんこんばんは。残暑厳しい中にも、秋の訪れが感じられるような季節になりました。本日は一般財団法人日本文明研究所設立記念のシンポジウムを開催するにあたりまして、大勢の皆さまにご出席していただき、心よりお礼申し上げます。

日本文明研究所は、作家の猪瀬直樹先生を所長にお迎えし、本学の後藤俊夫教授を会長として設立し、本日は田原総一郎先生をゲストとしてお迎えして、その記念としてこのようなシンポジウムを開催する運びとなりました。

戦後七〇年を経て、日本は海外から「Japan as No.1」と言われ、



都築仁子理事長

「Japan basing」を受けたこともありました。しかし、バブル崩壊以降は、「Japan passing」はたまた「Japan nothing」と言われるなど、さまざまな評価を受けております。

それが、東日本大震災を経て、あらためて日本に対する賞賛の声も聞かれるようになりました。都築学園グループは全国で世界中から最も多くの留学生を受け入れている学園として、その留学生たちは日本のことをもつと知りたい、日本で学びたいという思いで一心に勉学に励んでおります。

近年、学園では世界の著名大学であるオックスフォードやケンブリッジ、そしてハーバードとの国際交流を通し、日本に対するさまざまな意見や質問を受ける機会が多くなりま

した。その際、震災復興のめざましさもあって、海外の教育関係者から、「日本では、こういう教育をしているのですか」という質問が少なくないのですが、実際には私どもが認識していないことが非常に大半であります。私自身は、即座に答えられない問いを解く鍵は日本の伝統と歴史の中に眠っているのではないかと、いうことを日々、実感しております。

米国の国際政治学者サミュエル・ハンチントン博士の言葉を借りれば、日本は、中国文明の端にあるのではなく、日本文明として独自の固有の文明を有しています。そうした意味でも、この日本文明とは一体何なのかを明らかにしていく取り組みの中で、未来に向けて、そしてグローバルな社会に対して、国内はもとより



紀伊國屋書店高井昌史社長

海外にも発信を重ね、日本が世界、地球に貢献できる要素を持っているということ、この研究所を通して解明し発信してまいりたいと思っております。本日はそのキックオフの大事なスタートでございます。皆さんと一緒にこのスタートラインを切りたいと思います。最後までどうぞよろしく願いたします。

司会 ありがとうございます。ご来賓より祝辞を頂戴したいと存じます。株式会社紀伊國屋書店代表取締役社長の高井昌史さまよりご祝辞を賜りたいと思います。どうぞよろしく願いたします。

高井 ただいまご紹介いただきました紀伊國屋書店の高井でございます。祝辞と言われて私この文明研究所の理事を仰せ付かっておりますから、この日本文明研究所をしつかりした団体にしなければいけないという役目を背負っております。紀伊國屋書店は都築学園グループと本当に長い付き合いでお取り扱いをいただいております。非常に感謝しております。都築総長には長年、ご支援をいただいております。個人的にも総長の教育への情熱、経営力、リーダーシップには心より感服しております。本団体について

も常々、構想はうかがっておりますが、かくも迅速かつ、このように立派な式典を挙行し、田原先生、猪瀬先生、後藤先生を招いたシンポジウムが開催できるとはまさしく総長のリーダーシップの賜物と思っております。

私自身は、都築学園グループの横浜薬科大学の学外理事もさせていただいております。実は同大学は、今年全国で最も受験生が集まった学校で、受験者の前年対比の伸び率が一七八%とダントツの人気校です。二位には一二〇〜一三〇%台がありましたがあととはどこも一〇〇%割れのところばかり。これもすばらしい総長のリーダーシップでしょう。また横浜薬科大学には江崎玲於奈先生が学長をされていますが、このたびは猪瀬直樹先生が所長に就任されるというところで、私もしつかりやっていかなければと思っております。

紀伊國屋書店は全国で大型店を六六店舗、海外にニューヨーク、シンガポール、バンコク、マレーシア、シドニー、中東ドバイまで二七店舗を展開しております。「日本」を世界に発信していこうという総長の考えに私も微力ながらお手伝いでき

るよう、しつかり日本の文明を世界に広めていきたいと思っております。本日はお招きいただきまして本当にありがとうございます。

司会 高井さま、どうもありがとうございます。続きまして株式会社P H P研究所代表取締役社長の清水卓智さまにご祝辞を賜りたいと思います。清水さま、どうぞよろしく願いたします。

清水 ただいまご紹介にあずかりましたP H P研究所の清水でございます。昨日お電話をいただいております。お邪魔したのですが、祝辞を頼まれましたものの何を話してよいかわかりません。それで原稿にしてみましたものを読ませていただきます。

まず、皆さんにはP H P研究所の社長がなぜここにいるのかということが疑問ではないかと思っております。実は私が本日ここにお招きいただきましたのは私どもの創設者の松下幸之助と都築グループさんとは相当以前から深いご縁をいただいております。素敵な交流を重ねてこられたと聞き及んでおります。そうしたご縁があり、お招きいただいた次第です。

松下幸之助のことを少しお話しさ



PHP研究所清水卓智社長

よつと考えてみました。松下が書いた本の中に『道をひらく』という作品がありますが、その中に「日本よい国」という一文を寄せているんです。それを皆さんにご紹介して私のご挨拶とさせていただきます。

「日本よい国」 松下幸之助

花が散って、若葉が萌えて、目のさめるような緑の野山に、目のさめるような青空がつづいている。

身軽な装いに、薫風が心地よく吹きぬけ、かわいい子供の喜びの声の彼方に、鯉のぼりがハタハタと泳いでいる。

五月である。初夏である。そして、この季節にもまた、日本の自然のよさがいきいきと脈うっている。

春があつて夏があつて、秋があつて冬があつて、日本はよい国である。自然だけではない。風土だけではなく。長い歴史に育くまれた数多くの精神的遺産がある。その上に、天与のすぐれた国民的素質。勤勉にして誠実な国民性。

日本はよい国である。こんなよい国は、世界にもあまりない。だから、このよい国をさらによくして、みん

なが仲よく、身も心もゆたかに暮らしたい。

よいものがあつても、そのよさを知らなければ、それは無きに等しい。もう一度、この国のよさを見直してみたい。そして、日本人としての誇りを、おたがいに持ち直してみたい。考え直してみたい。

こういう一文を松下は書いたわけですが、都築理事はじめ、猪瀬所長が中心として文化人、知識人の皆さんの衆智の結集によつて日本文明研究所のますますのご活躍、ご発展を祈念いたしました。ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

司会 清水さま、どうもありがとうございます。ございました。それでは本日のメインプログラムとなりますパネルディスカッションに入りたいと思います。パネリストの皆さまをご紹介させていただきます。ジャーナリストで評論家の田原総一朗さま。作家で前東京都知事の猪瀬直樹さま。日本経済大学大学院教授であり日本文明研究所会長の後藤俊夫さま。以上の三名の皆さまです。どうぞよろしくお願ひいたします。

パネリスト紹介

たはら・そういちろう氏

ジャーナリスト。テレビ朝日系『朝まで生テレビ』『サンデープロジェクト』でテレビジャーナリズムの新たな地平を拓く。早稲田大学特命教授、「大隈塾」塾頭。テレビ朝日系『朝まで生テレビ』『BS朝日『激論！クロスファイア』他、テレビ・ラジオ出演多数、著書多数。一九三四年生まれ。

いのせ・なおき氏

作家。日本文明研究所所長。一九八六年『ミカドの肖像』で大宅壮一ノンフィクション賞。一三年一二月東京都知事を辞任。著書『猪瀬直樹著作集 日本近代』（全十二巻）他多数。一九四六年生まれ。

ごとう・としお氏

日本文明研究所会長。日本経済大学経営学部長、大学院教授。ハーバード大MBA。NEC勤務、国民経済研究協会・常務理事（兼企業環境研究センター所長、静岡産業大学国際情報学部教授などを経る。著書多数。一九四二年生まれ。

日本文明とは何か

以下「週刊読書人」より転載

猪瀬 文明とは何か。日本文明研究所の設立趣意にその名があがっている国際政治学者のサミュエル・ハンチントン博士は、その著書『文明の衝突』の中で、現在の文明を分類すると、八つあると言っています。その一つは、近代社会を作った西ヨーロッパ文明。対するロシア正教会系の東ヨーロッパ文明。イスラム文明、インドを中心としたヒンズー文明、アフリカ文明、南アメリカを含めたラテン文明。アジアでは中国文明。韓国も中国文明に分類されています。そして八つ目に日本文明。中国文明と日本文明を分けて考えているのです。しかしそれでは、日本文明とは何か。

「日本らしさ」の認識は千差万別です。二年前のオリンピック招致では、日本のいいところをできるだけ集めてアピールしました。しかし招致が決まった後、日本人の悪いところが露わになっっている。例えば新国立競技場の問題が浮上しました。一五五〇億円という値が出ましたが、二五



猪瀬直樹所長

〇〇億円から、一〇〇〇億円引いて、数字的に辻褄を合わせればそれでいいのか。安倍首相が七月十七日に白紙撤回を決定しましたが、この問題がズルズル続くと、二〇二〇年の東京オリンピックに、競技場が間に合わなくなる可能性があつた。

こうした決断不在は現在に限ったことではなく、一九四五年に遡ると、八月六日に広島、九日に長崎に原爆が落とされても、日ソ中立条約を無視しソ連が対日参戦したところでも、御前会議でまだポツダム宣言受諾を決められなかった。堂々巡りの議論の末、ようやく八月十四日夜受諾、翌十五日終戦となる。このとき、もつと戦争が長引いていたら、三発目の原爆が落とされ、ソ連侵攻で北海道は「北海道人民共和国」になつて

いたかもしれない。この決断できないという欠点を、日本は昔も今も課題として抱えています。

また戦後七〇年を迎えましたが、日本にとつてあの戦争は何だったのかという分析、総括の足りぬまま、安保法案改正、集団的自衛権行使の討議が行われている。まず、現在の日本が直面しているその問題から、田原さんにお話を伺いたいと思います。田原 毎週土曜日の朝十時から、BS朝日で「激論！クロスファイア」という番組に出演しているのですが、明朝放送の番組を、昨日収録したのです。自民党から元自衛隊のヒゲの佐藤正久、民主党から福山哲郎、維新の党の小野次郎、いずれも参議院の、安保関連法改正問題の中心的メンバーです。三人に安保について聞きました。全く議論が進展しませんでした。というのは、同じ「安全」や「抑止力」という言葉でも、三者で意味するところがバラバラ。

戦後七〇年間、日本は安全保障をまともに考えてこなかったんです。安保について考えないことこそが、平和だと思つてきた。だから安保法案を改正して、実際に戦争が起きたとき、日本はどう対処するのか、後



ジャーナリスト田原総一朗氏

方支援とは何をするのか、どんなリスクがあるのか、という具体的な事柄について、話合いができる共通のフィールドがないんです。

日本文明を考えるにしても、現在、日本人は共通の認識を持っていない。そのバラバラの世界認識をどうすればいいのか、そこから話を始める必要がある。

猪瀬 戦後の日本は、デイズニールンドだと思ふんです。そこにリアルはない。門番はアメリカ兵で、沖縄だけデイズニールンドの外にある。七〇年間、デイズニールンドの中で、平和で安定して、自分たちのアイデンティティを考えなくなつていった。我々は日本の自画像を、今、改めて知る必要があるんですよ。

ここで後藤先生に日本のよい点を



後藤俊夫会長

お話いただきましょう。後藤先生は老舗について研究し、『三代、一〇〇年潰れない会社のルール』を上梓しています。日本には長寿企業が突出してあるそうですが、その要因をお話いただけますか。

後藤 日本に一〇〇年企業は二五〇〇〇社以上あります。二番目のアメリカはその半分以下。三番目にドイツ、次いでイギリス、スイス、イタリア、フランス、オーストリアと続きます。しかし国土もGDP（国内総生産）も国ごとに違うので、企業数だけでは量れないところがありますから、GDPで割った相対値も出しました。すると、アメリカは十七番目に落ちますが、日本はここでもトップです。日本は絶対値でも相対値でも長寿企業率が高いのです。

それではなぜ、日本は長寿企業大国なのか。一つは近代的なマネジメントが、江戸時代から進んでいたということ。二つ目に外部要因として、市場が比較的緩やかに伸びてきたこと。そして最も大きな要因は、家業を続けていくという強い意志があったこと。

そこで今度は、長寿企業に見る日本文明の特徴を三つ挙げます。一つは和の精神。二つ目が文化相対主義。これは外来の文化を受け入れ、学習して自分のものにするということ。その裏には変化への柔軟な対応がありますが、これには、多神教である神道が影響していると考えています。三つ目は精神性を含むさまざまな向上意欲です。細部にこだわり、いいものを追求していこうとする、技術に対する職人気質はもちろんのこと、柔道や茶道などの「道」が追求する精神性の向上も含みます。

近江商人の「公」概念

猪瀬 江戸時代は市場経済社会です。封建社会ですが、一方で商人文化が

豊かに成熟した時代でした。越後屋や松坂屋など、現在の企業にあたる商店も誕生しています。一六〇三年の江戸開府から一〇〇年間で、人口は約一五〇〇万から二倍の三〇〇〇万になっています。高度経済成長です。それは明治維新で近代国家に目覚め「坂の上の雲」を目指した時期や、第二次世界大戦後からバブル崩壊までの時期に似ています。

むしろ高度成長後一五〇年間のゼロ成長の時代に、近江商人に見られるような倫理観が培われています。

田原さんは近江商人発祥の彦根出身です。近江商人は「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」という「三方良し」の考え方を持っていました。こうした「公」概念は今の日本経済にも通用する考え方だと思うのですが、田原さん、その点についてお話しいただけますか。

田原 僕は子どもの頃から、近江商人って大嫌いだっただけ。どぎつくてがめつくて貪欲で、近江商人の歩いた後には、草も生えないと言われていた。しかし三十歳を過ぎた頃から近江商人について考え直しました。「三方良し」は、先ほど猪瀬さんが言ったのは順番としては少し違って、商

トの世界だということです。

もう一つ、近江商人には「運鈍根」という言葉がある。世の中は、運がなければ渡れない。でも運はいい悪いじゃない。「鈍」―バカになつて、「根」―根気よくやると、運が向いてくる。それを子どもの頃から祖母に言われていました。

同じことを言ったのが、松下幸之助なんです。あるとき、松下さんに「あなたが部下を、役員や関連会社の社長に抜擢するとき、どこを見



日本経済大学名誉教授

るのか」と聞いた。すると、「運」だと言いました。運がいいか悪いか見て分かるのかと聞いたら、分かるという。運というのは、難しい問題にぶつかつたときに、悲観的にとらえないこと。むしろそれを面白がつて前向きにとらえると、物事がうまく展開する。それが運だ、と。近江商人と松下幸之助は、同じ精神を持つていたんです。

後藤 「三方良し」の話が出ましたが、近江商人は、そうあらねば生きていけなかつたのでしょうか。異国で行商するには、その土地の人のために働き、受け入れられる必要がある。松下幸之助翁は「企業は社会の公器である」と言いましたが、和の精神は、公益重視へと通じ、また長寿企業をも生むのではないかと思っています。

田原 一方、「和」の悪い例の典型が、東芝事件だと思うんです。あれは完全な粉飾決算ですよ。

後藤 確かに。はじめは組織のためによかれと思つたのかもしれませんが、猪瀬 「和」という言葉も、使いやすい言葉だけれど、正体を突き詰めるとは難しい概念ですね。今回の新国立の問題も、また霞が関の官庁の

体質もそうだけれど、現在の日本社会の中に、「和」という建前でリスクを分散し、個人が責任を取らないというよくない体制が蔓延している。おもてなしとか、相手を尊重するとか、日本のよい伝統を引き出すためにも、「和」の構造を解析することが必要になるでしょう。

文明と文明の衝突の時代

後藤 ハンチントン博士が『文明の衝突』の後に出版した『文明の衝突と二一世紀の日本』には面白いことが書いてあります。それは、東西冷戦終結後、世界が平和になったと思

うかもしれないが、大間違いである。これからは国と国の対立ではなく、文明と文明の衝突になる。そして、文明は衝突を招くだけではなく、衝突を緩和する可能性を持っている、と。そこで出てくるのが日本文明です。日本文明はきわめてユニークな特徴を持っている。八つの文明の中で、ただ一つの孤立し多神教に立脚した文明で、だからこそ世界を救う可能性が秘められているかもしれない

人として生きていくにはまず「お客さんにとって良し」なんです。そしてお客さんに信頼されることで社会からも信用される。それが「自分にとって良し」になるということです。

近江商人発祥の地の五個荘へ行きますと、「%」みたいな家紋があります。棒が一本に、丸が二つについている。これは天秤棒を担いで、太陽が昇るときから月が出るまで働くという印。ハードウエアは天秤棒一本。あとは全て自分の頭と身一つ。ソフ



い、と。

田原 世界ではまさに今、キリスト教文明とイスラム文明が、真つ向から対立しています。こういうときに日本はどうすればいいんですか。

後藤 それは逆に田原さんにお聞きしたいのですが、今の日本は、まづ立ち位置を明確にするところから始めねばならないでしょうね。長い歴史の中で、日本には二つの局面が繰り返して起きました。一つは他から学ぶということ、もう一つは、独自の文明を創るということです。

過去に遡ると、遣隋使・遣唐使を通じて外来の事物を学習した時代の後、平安時代には平仮名の発明や源氏物語など、独自の文明の発達と熟成が起きています。その時代は「和魂漢才」という言葉で表されます。

その後、安土桃山時代には、南蛮から鉄砲やキリスト教が伝来し、織田信長が外来文化を積極的に取り入れました。一方、江戸時代には、鎖国体制の中で日本化が起こり、仏教や儒教を日本のものにする。この江戸時代末期は、「和魂漢洋才」の時代と言われます。つまり日本人の魂を保ちながら、中国と西洋の技術を吸収したということです。

そして明治時代は「和魂洋才」で、文明開化、西洋技術の旺盛な吸収があり、大正から昭和にかけては逆に、民族主義が勃興、太平洋戦争に突入します。猪瀬さんが「デイズニールンド」と言われた第二次世界大戦後は、とにかくアメリカに追いつけ追いこせで、経済や科学技術を海外からどんどん学ぼうとした時期です。

しかし冷戦終結後、現在の我々は、どちらを向いたらいいのか分らなくなっている。今こそ日本人の魂とは何か、「和魂」ということを考える必要があります。

田原 後藤先生の同窓である、東大の近代史の学者たちに取材したことがあるんです。明治の和魂洋才の「魂」とは何なのかと。そうしたら教授たちは、「そんなものはない」と言った。なかったけれど、あるふりをしていたからよかったのだと。戦後、日本は平和主義でやってきた。しかし、猪瀬さん流に言うとそのそれはデイズニールンドであり、和魂がない。アイデンティティがない状態が続いてきたのだと。

猪瀬 マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』には宮利の追求を良しとする



中国にはイギリスが来て、アヘン戦争が起こった。同じような状況の中で、なぜ日本は中国のように植民地にならず、むしろ、植民地を作る側に立ったのですか。

猪瀬 僕は、儒教の存在だと思っています。儒教には体系があるから岩盤が固くて、キリスト教を跳ね返そうとした。日本は柔構造なので、異なる文化を受け入れた。

後藤 確かに不平等条約に対して、

ピューリタニズムの経済倫理が、近代の資本主義を生み出したと説明されています。近代とキリスト教を語って能弁です。しかし「和魂」という言葉は、分解しても分らない。和魂とは何か、指し示せるものがない。

日本は侵略戦争をしましたが、帝国主義ではなかったと思うんです。日本人にとって天皇が精神文化の支柱だった時代がありました。侵略した国々で、天皇を絶対のものとして拝めとは言わない。つまり「和魂」とは、体系だった定まったものではなく、日本の風土の中で自然に培われていくソフトウェアなのではないか。そして戦後、田原さんの言うように、日本人は和魂を見失っている。

ここでもう一つ考えるのは、いつの時代を指して「日本」というのか。ハンチントン氏は、日本文明は西暦一〇〇年から四〇〇年の間にできたのではないかと言っています。古墳時代の卑弥呼の時代です。一方、例えば三島由紀夫が言う「日本」とは、明治時代に作り上げられた一つの幻想のことだと思っています。明治維新で、三〇〇ほどの「おらが国」が、統一され日本国となりますが、つまり明治以前には、国家としての日本は存在

していないとも言えるのではないかと。

柔構造「和」の伝統と 欧米のロジカルな文明

田原 三島由紀夫の日本論で違和感があるのは、明治の日本はロシアのまねをしたんです。伊藤博文と井上毅がロシアに視察に行き、ロシアの国家体制をまねて、首相を作り、議会を作り、皇室典範や、大日本帝国憲法を作った。

猪瀬 確かにロシアのシステムを借りて、明治以降の日本は作られました。そこで大きく変わりましたから、過去から受け継いだものもあれば、失われてしまったものもある。

しかし僕が言いたいのは、意識の問題。明治維新以前は、意識の上で、日本が唯一のコスモスだった。そこへ黒船が来て、世界にはたくさんの方がおり、国際社会では国際法が必要であることを知る。そのとき初めて「日本」が世界という姿に映され、三百諸侯のアナロジの展開が地球儀上で初めて起こったと思うのです。

そこで、先日出版された田原さんとの対談本『戦争・天皇・国家 近

において、国際社会でどう生き抜いていくかというところに日本は立っている。日本が全て独自で防衛予算を組んだら、二〇兆円以上かかると言われています。今のところ、どのようにアメリカとの関係を作っていくか、という話にならざるを得ない。

安倍さんの主張する集団的自衛権は、アメリカからの要請がかなり強かっただろうと思います。でもそれにしても、アメリカ側に対して、日本側からも具体的に要求すべきことがあったのではないか。例えば東京上空の空中権の返還。東京の真上の空は、全てアメリカが持っているんです。

だから旅客機が離陸するとき、急角度で上がらなければいけない、燃料を食う。日本列島の航空主権を我々は握っていない。これで主権国家と言えるのか。要求しながら、協力するという関係、もちろん対等な関係ではないですけどね。

田原 僕も番組の中で、日本が集団的自衛権を行使するのは、アメリカに助力するためのだから、それに對して日米地位協定の改定を、なぜ申し入れないのかと言いました。そうすべきだと言っているのは、石破茂という男です。石破と安倍は、同

代化一五〇年を問いなおす』の延長線上で一つだけ言うと、我々は改めて今、欧米のすごさを認めるべきだということ。A級戦犯が二十八人起訴された東京裁判で、アメリカ人の弁護人がこう言います。この東京裁判において、平和に対する罪というのは、あとから作った法律ではないかと。

田原 そう、事後法だと言いましたね。

猪瀬 平和に対する罪を裁くことが間違っているのなら、この法廷自体がおかしい、と言うんです。そしてさらに、人殺しは戦争では無罪である。広島に原爆を落とした国の元首を私は知っている、と。それに対して、アメリカ人検事が、これは文明に対する闘いである。つまり特別な裁判なのだ、と言う。つばぜり合いをロジックでやっている。我々は戦争に負けましたが、もし勝っていたとして、このような裁判を行うことができたのか。日本的な和の伝統に、欧米の体系的でロジカルな文明をどうブレンドするべきか。それが七〇年たった今も課題として目の前にあるのだと思っています。

田原 ペリーが日本に來たように、

じ集団的自衛権を主張しながら、自身は全く違う。だから彼は防衛大臣を受けなかった。

後藤 戦後七〇年がたって、アメリカと戦争をした事実を知らない若者もいるそうですね。文明研究所は、日本精神、現代文化、老舗、伝統工芸などに示される日本文明について研究するだけでなく、今後、国内外に発信をしていきます。国外にも発信していくためには、歴史を認識し、日本的でありながら、ロジカルでなければなりません。

猪瀬 怖いのは、以心伝心や和の心を、アプリオリに持っていると思ひ込んでしまうこと。意識化しないと、持っていることにはならないんです。二〇二〇年は東京オリンピックが行われ、世界中が日本に注目するでしょう。そういう中で、この文明研究所がどんな情報発信をしていくか。本日は試行錯誤の第一歩ということになりました。「和」や「日本」、「伝統」というものを因数分解して、具体的に見えるようにするためには、認識、自覚の問題になってくると思うんです。これからそうした課題を一つひとつ考えていきたいと思っています。（おわり、文中敬称略）